Vol. 70　2009年7月

国際交流センターニュース

International Center Newsletter

北見工業大学 国際交流センター　〒090-8507 北見市 公園町 165

私の祖国

今アフリカ大陸西部に位置する連邦共和制国家、ナイジェリア。ナイジェリアが世界有数の産油国であること、アフリカ最大の人口を擁する国であることなど、皆さんはご存知でしょうか。今月は、４月に本学の博士後期課程に入学した、ナイジェリア出身のオケドゥ・ケネスさんに、祖国を語ってもらいました。

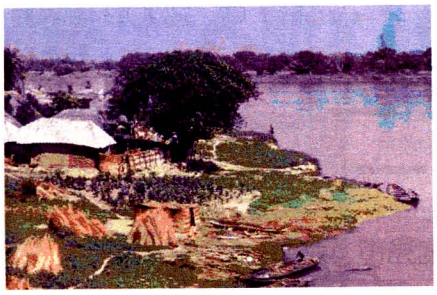
オケドゥ・ケネス
システム工学専攻
博士後期課程１年

ナイジェリアは、アフリカ西部に位置する国で、連邦首都地区と３６の州から成っています。人口の多さでは他のアフリカ諸国を大きく引き離して第一位です。英語が公用語ですが、もともと多民族・多言語の国です。国民の多様性は豊かな文化を生みますが、国づくりにおいては困難の元でもあり、１９６０年の独立以来、民族間の争いに悩まされてきました。

以前は農業が国の主産業でしたが、現在、国の経済はとことん石油に依存しています。輸出額のほぼ１００％が石油、政府の総収入も約８割が石油から来るものです。それゆえ、世界の原油価格の変動が国の経済を大きく左右します。産油地帯ニジェール・デルタの１５０余りの油田から、２００４年には合わせて約８億２千万バレルが生産されました。油田の約２割は沖合いにあり、生産コストは高いですが、ナイジェリアの石油は硫黄の含有率が低いために高値で売れます。輸出の半分はアメリカ合衆国向けで、残り半分の輸出先のほとんどはヨーロッパ諸国が占めています。

ピーナツを収穫する女性たち

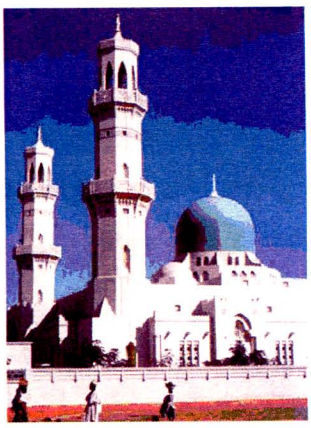
ナイジェリアの主な食べ物は、米、ヤムイモ、豆などですが、主食はガリーという、キャッサバ（和名：芋の木）から作る食べ物です。キャッサバは植えてから９ヵ月後に収穫し、皮をむき、すりつぶし、大きな袋に入れて機械で３日間圧縮します。搾り取った液体からでんぷんを取り、袋に残ったかすを油で揚げて濾したものがガリーで、スープに浸して食します。ナイジェリアではスープの種類が豊富で、ヤシの実から作るバンガ・スープ、メロンから作るエグシ・スープ、ビター・リーフやウォーター・リーフから作る野菜スープなどがあります。



ニジェール川沿いのかやぶきの家々

ギニア湾沿岸に位置する
ナイジェリア最大の都市ラゴス

１９世紀末、キリスト教が国の南部で確立されました。南西部には英国教会、南東部にはローマカトリック教会が宣教に入りました。今日、クリスチャン人口は南西部では半数近く、南東部では半数を優に超えており、前述の二宗派のほか、長老派、ルーテル派、バプティスト派などが存在します。近年ではプロテスタントの原理主義が起こり主に中部地方で勢力を拡大してきました。ケルビムやサラフィムといった、アフリカの独自の宗派も多数存在し、ドラムやダンスなど土着の文化と融合して、一夫多妻制も取り入れています。北部ではイスラム教が盛んで、中部や南西部にも勢いを伸ばしつつありますが、女性の隔離や厳しい断食といった習慣が見られるのは北部の町だけです。イスラム原理主義は１９９０年代から徐々に信者を集めており、北部では政治においても権力を得つつあります。



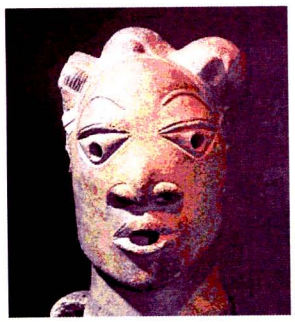
北部の都市カノのモスク

ナイジェリアの文化には、アフリカ、イスラム、そしてヨーロッパの影響が見られます。北部の建築や彫刻はイスラム文化の影響が色濃く見られます。イスラムの文化では人間や動物を創作することが禁じられているため、北部では宗教的な彫像などの芸術品は皆無と言って良いでしょう。一方南部では、ヨーロッパ人の到来のはるか前に、原住民が独自の芸術を生み出していました。ポルトガル人がベニン王国（1170-1897）のブロンズ像に初めて見られたのは１６世紀のことです。植民地時代の初めから、西洋文化はナイジェリアの文化を脅かすと同時に豊かにもしてきました。ナイジェリアの現代文学は、何千年も前から伝承されてきた物語文学と歴史文学の伝統から生まれたものです。口承文学のジャンルは、ことわざや庶民の小話的なものから宮廷のおかかえ歌手のために入念に作られたものまで多岐に及んでいます。

ニジェール・デルタの
巨大なオイルタンク

そうしたナイジェリアの豊かで多様な文化遺産は二千年以上の歴史を持っています。初期の主な作品は、プラトー州の州都ジョスの近郊で発掘された、紀元前500年から紀元200年のノク文化の時代に作られたと見られるテラッコッタ（粘土の素焼き）製の彫刻類です。これらは、イフェ市から出土した１３世紀の青銅の人頭、およびベニンで発掘された１１世紀以降のものとみられる青銅の像や象牙の彫刻と並んで、ナイジェリアの最も重要な文化財とみなされています。しかし、こうした文化財の多くは植民地時代に略奪され、西洋諸国の美術館に展示されています。政府は特にベニンの出土品を取り戻そうと要求を続けてきていますが実現には長い道のりがありそうです。

ベニン王国の
高浮彫り青銅プラーク



ノク文化時代の
テラコッタ製の頭像

大学祭あれこれ

６月２０・２１日の週末に開催された本学の大学祭で、国際交流センターでは今年も留学生対象の日本文化体験および国際交流イベントを企画しました。

まず土曜日の午前中は、今年も市内の生け花師範、西野禧代子先生をお招きして生け花教室を開きました。先生に「風を感じて生けてください」とのお言葉を頂いて取り組んだ生け花。台湾から来ている短期交換留学生、スウ・シャウシェンさん（写真←）は、「予想したより難しかったです。生けてある花を見るときれいだなーと思いますが、いざ自分がやってみると、どうやって始めたらよいのか戸惑いました。でも、もっとやってみたいです」と話していました。

出来上がった生け花は、午後からの国際交流お茶会に飾りました。お茶をたててくださったのは、今年も藤女子高校茶道部の皆さん。留学生のみならず、一般学生・市民の方々も多数訪れて、午後の一服を楽しんでいました。着付けは去年に引き続き、市内在住の加藤モモ子先生にお世話になり、１２名の留学生が色とりどりの着物姿でキャンパスをあやどっていました。

そしてお祭り広場では、多数の留学生がお国の味を提供してくれました。今年の特徴は、留学生のブースを荷担する日本人学生が現れたこと。その一人で、台湾の屋台でビーフンや「もちもちタピオカティー」を売っていた機能材料工学科大学院生の結城雄大くん（写真↓）は、「面白そうだなと思って手伝い始めたところ、やはり面白くてどんどんのめりこんでしまいました。タピオカを買いに来るお客さんが多くてビックリしました」と話していました。

目下、餃子の製作中

チヂミの売れ行きは？

店番は日本人

ナイジェリアは「アフリカの巨人」と呼ばれています。それはアフリカーの人口の多さゆえであり、天然資源の豊かさゆえであり、外国資本（シェル、モービル、トヨタ、ホンダ、日産、フォード等）にとってのアフリカ最大の市場のゆえであり、またアフリカ最強のサッカーチームを有するためでもあります。残念ながら、現状では政府が国民に基本的な生活を快適に過ごすための施設やサービス、安全、そして雇用の機会を提供できるには至っていません。国の潜在能力を生かしきれずまだまだ発展途上にあるのが現状です。今後の政情の好転と生活水準の向上を願ってやみません。

一人旅x10カ国x10ヶ月＝100人の友達

@ International "C" Hour

６月のインターナショナルＣアワーは、「一人旅ｘ１０カ国ｘ１０ヶ月＝１００人の友達」と題して、本学大学院機械システム工学専攻１年の若松亨さんが、アジア・オセアニア諸国を働きながら旅した経験を語ってくれました。

熱心に聞き入る参加者

若松さんは３年生のとき、アメリカで行われた本学の短期語学研修に参加。それをきっかけに昨年度、大学院を１年間休学して一人旅に出立しました。スライドでは主に、ニュージーランドで見た原住民によるコンサート、オーストラリアでの農作業、エアーズロックの風景や野宿の様子、タイでの世界各国の若者とのハイキングツアー、そして広州から上海までの汽車の旅などを紹介し、各地で知り合った人々とのふれあいが、旅をいかに豊かなものにしてくれたかを語ってくれました。話のあとは、参加者から次々に質問の手が上がりました。

交流のひととき

参加者の一人、機械工学科３年の藤井勇貴君は、「泊まるところなど考えないで行って、資金調達も現地で行うのがすごい。それに、行った国々の言葉を英語しか知らなくても、やれば何とかなるものなんですね」と感心していました。

投げた！打った！笑顔がはじけた！

～OFIC主催ソフトボール～

６月２７日土曜日、ＯＦＩＣの主催で、初の留学生・日本人学生合同のソフトボール大会が催されました。参加した留学生のほとんどが初心者という状況で、全員がルールを把握するのがまず大変だったようですが、２試合目には皆要領を飲み込み、初夏の晴れた空の下、次々に快音をひびかせていました。

中国からの短期留学生、ルオ・ザンさんも、この日初めてバットを握った一人。試合後に自分のバッティングフォーム（写真→）を見せられると、茶目っ気たっぷりに笑いながら、「僕、けっこういけるとと思う」。他の留学生も皆とても楽しんだ様子で、口々に「ものすごく面白かった、是非またやりたい」と興奮気味に話していました。